聖霊降臨後第 3 主日（特定 5）　マルコ 3 章 20―35 節

［新共同訳］

20 イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。21 身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。

22 エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言っていた。23 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。24 国が内輪で争えば、その国は成り立たない。25 家が内輪で争えば、その家は成り立たない。26 同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。27 また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。28 はっきり言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涜の言葉も、すべて赦される。29 しかし、聖霊を冒涜する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」30 イエスがこう言われたのは、「彼は汚れた霊に取りつかれている」と人々が言っていたからである。

31 イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。32 大勢の人が、イエスの周りに座っていた。「御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と知らされると、33 イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、34 周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。35 神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」

①文脈

ⓐ 3 章 7―12 節では、さまざまな地方からの群衆が病気をいやしてもらおうとイエスに殺到する。イエスは押しつぶされないように、小舟を用意させるほどであったが、汚れた霊どもはイエスを見るとひれ伏して「あなたは神の子だ」と叫んだ。

ⓑ 3 章 13―19 節では、イエスがこれと思う人を呼び寄せて十二人を任命し、使徒と名付けている。それは「自分のそばに置くため」であり、「宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせる」ためであった。こうして、イエスがもたらした使信と働きを継承する人々を育て上げている。

Ⓒこれらの群衆にせよ、弟子たちにせよ、イエスを完全に理解していたわけではないだろう。しかし、不完全ではあっても、イエスによって何かが始まったことに気づいている。ところが、イエスを理解しようとするこれらの人々とは違って、イエスをまったく否定する人たちもいた。3 章 20 節以下ではそのような人たちが登場する。

②イエスに対する人々のうわさとそれに対するイエスの反応

ⓐ 3 章 20―35 節は二つの部分に分けることができる。一つは 20―21・31―35 節である。この段落では、「あの男は気が変になっている」とのうわさを聞いた身内の者が、イエスを取り押さえ

ようと出て来るが、イエスは彼らを拒んで、「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」と述べている。

ⓑ第二の段落は 22－30 節である。この段落の冒頭には、律法学者が「あの男はベルゼブルに取りつかれている」とか「悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」とか言っていたとあり、段落の結びには人々が「彼は汚れた霊に取りつかれている」とうわさしていたとある。

ⓒ身内の人たちは「気が変になっている」という風評に動かされて同調し、イエスを取り押さえに来た。権威を背後に持つ律法学者は、人気を博すために悪霊の手下となった愚かな男だ、と中傷する。どちらも、イエスの真実の姿を見落としている。

③取り押さえに来た身内の人たち（21 節）

そして　聞いて　彼からの者たちが　出て来た　押さえるために　彼を。
彼らは言っていた　なぜなら　次のことを
「彼は正気を失った」。

ⓐ「身内の人たち」は「イエスのことを聞いて取り押さえに」来た。新共同訳のように、『『あの男は気が変になっている』と言われていたからである」と訳せば、身内の者がイエスを取り押さえに来たのは、彼についての悪い風評を聞いたからだということになる。新共同訳は傍線をつけた「彼ら」を不特定の人々ととり、それを、受動表現を使って「…と言われていたからである」と訳した。しかし、この「彼ら」を「身内の人」と取ることも不可能ではない。そうであれば、イエスは正気を失っていると判断しているのは身内の者になる。いずれにしても、身内の者も「イエスを押さえるために」出て来ており、イエスを理解できなかったのは確かである。

④「エルサレムから下って来た」、つまり権威をもった「律法学者」（22 節）

そして　律法学者たちは　エルサレムから　下った者たちは　言っていた　次のことを
「ベルゼブルを　彼は持っている」
そして　次のことを
「頭によって　悪霊たちの　彼は追い出す　悪霊たちを」。

ⓐ第二の段落は、冒頭（22 節）と結び（30 節）に律法学者と人々のうわさを述べ、その間にイエスが語った答をはさんでいる。ここで注意しておきたいことは、律法学者は（そして人々も）イエスが悪霊追放を行っているという事実を決して否定していないことである。彼らはその事実を認めたうえで、ただし、それは「悪霊の頭の力」を借りてのことだ、と見なして、イエスを非難している。このことが示しているように、ここでの論点は、イエスはほんとうに悪霊を追い払うことができたかどうかという事実の問題ではない。問われているのは奇跡の有無なのではなく、悪霊を追い払っているイエスは「誰か」ということである。

ⓑ律法学者の非難に対するイエスの回答は次のように展開されている。

㋐23 節後半――26 節

23 そして　呼び寄せて　彼らを
　譬えによって　彼は言っていた　彼らに、
「どのようにして　できるか　サタンが　サタンを　追い出すことが
24 そして　もし　国が　自身に対して　分けられるなら、
　できない　立つことが　その国は。
25 そして　もし　家が　自身に対して　分けられるなら、
　できないだろう　その家は　立つことが。
26 そして　もし　サタンが　立ち上がるなら　自身に対して　そして　分けられるなら、
　できない　立つことが、　しかし　終わりを　彼は持つ。

修辞的疑問文を使って、「どうしてサタンがサタンを追い出せよう」と語り始めたイエスは、続く24・25節で完全に対となった譬えをのべ、26節でひとまず結論を出している。サタンが内輪もめを起こすなら、サタンは立ち行かず、その支配は終わりを告げる。だとすれば、イエスがサタンの力を借りてサタンを追い出すことは不可能である。

㋑27節

27 しかし　誰もできない　強い者の家の中に　入って　彼の家財道具を　奪うことが、
　もし　ないなら　最初に　強い者を　縛ることが、
　そして　その時　彼の家を　彼が奪うであろう。

直訳を見れば分かるように、この節の冒頭には「しかし」という接続詞が置かれている。これは、22節の律法学者の主張に向けられた「しかし」である。27節も㋐と同様、22節の律法学者の非難に対するイエスの反論を述べる譬えである。この譬えに登場する「強い者」とはサタンのことである。まずサタンを縛りあげなければ、サタンの家に入り込むことはできない。だから、イエスの悪霊追放はイエスがサタンよりも強い者であることの証拠である。
イエスは律法学者の判断の間違いを指摘する。王国と家のたとえ（24―26節）と家財道具のたとえ（27節）を用いて、彼らの判断の不合理さを指摘する。国も家も内輪に争いがあれば成り立たないし、「強い人（サタン）」をイエスが縛り上げたから、「家財道具（サタンに捕らえられていた人々）」が所有者から解放されたのである。

㋒28―30節

28 まことに　私は言う　あなたたちに　次のことを
　すべて　赦されるだろう　人たちの子たちに　罪が　そして　冒瀆が
　ところのものがなんであれ　彼らが冒瀆する。
29 だが誰であれ　冒瀆するなら　聖なる霊に向かって
　彼は持たない　赦しを　永遠に、
　しかし　責めを負うべきで　ある　永遠の罪の」。
30 というのは　彼らは言っていた、　「霊を　汚れた　彼が持っている」

ここでいう「聖霊に対する冒瀆」とは何を指すのだろうか。文脈から言えば、律法学者の非難と関係があるはずである。つまり、イエスは律法学者の批判を聖霊に対する冒瀆と見ている。その理由は、イエスは聖霊によって悪霊を追い払っているからである。聖霊の働きであるのに、悪霊の仕業だと非難するのだから、それは聖霊に対する冒瀆であり、「永遠に罪の責めを負う」ことになる。イエスはサタンの力を借りて悪霊を追い出しているのではない。イエスはサタン以上の者であり、彼には聖霊が働いている。聖霊が働いているからには、イエスと共に神の支配が始まっている。律法学者は、そして、「イエスは汚れた霊に取りつかれている」と見ている人々もそれを見落としたのである。

⑤イエスのまわりに座る

31 そして　来る　彼の母が　そして　彼の兄弟たちが
　そして　外に　立って、　彼らは遣わした　彼のもとに　呼びながら　彼を。
32 そして　座っていた　彼のまわりに　群衆が、
　そして　彼らは言う　彼に、
「見よ、　あなたの母が　そして　あなたの兄弟たちが　［そして　あなたの姉妹たちが］
　外で　捜している　あなたを。」
33 そして　答えて　彼らに　彼は言う、
「誰が　であるか　私の母　そして　［私の］兄弟たち」
34 そして　見回して　彼のまわりに　ぐるりと　座っている者たちを　言う、
「見よ、　私の母　そして　私の兄弟たち。
35 誰であれ　［なぜなら］　行うなら　神の思いを、
　その者が　私の兄弟　そして　姉妹　そして　母　である」。

ⓐイエスは、彼のまわりに座っている者たちに「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」と語るが、捜しに来た身内の者に向けられた言葉でもある。イエスが運ぶ神の国（支配）は、血脈を中心とする人間関係を終わらせ、まったく新たな関係を作り出しているからである。それは神に呼ばれたという「内なる人」としての人間関係である。人との緊密な関わりを求める神は、イエスを通して決定的な介入を開始したのである。

ⓑしかし、イエスの母と兄弟姉妹は、イエスが現した神の支配に気づいていない。彼らはイエスにいる場所の「外でイエスを捜し」、「外に立つ」自分たちのもとへイエスを「呼ぶ」。それに対して、イエスの「まわりに座る」者たちのことが二回言及されている（32・34節）。彼らはイエスの教えや行いの意味を完全に理解していたわけではない。ただ彼らは「イエスのまわり」にいて、イエスの言葉を聞き続ける。ここでイエスが語る「神の思い」とは、彼らの取っている行動そのものである。

ⓒ神の力である聖霊が働くのであるから、人が自分の理解や経験に留まるなら、イエスの行動は常軌を逸したものと映る。しかし、神が人に望んでいることは、「イエスが正気を失った」と心配して自分たちのいる場所へと引き戻すことではなく、神が示している救いに驚き、イエスが与える喜びに身を合わせて生きることである。